

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	はじめに
Author(s)	秦, 恭子
Citation	国語教育思想研究 , 29 : 1 - 1
Issue Date	2023-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053952
Right	
Relation	



はじめに

九州大学大学院人間環境学研究院学術協力研究員 秦 恭子

上原輝男(1927-1996)が国語教育分野で成した業績を巡っては、これまで幾人かの国語教育研究者が言及を重ねてきた。それら論稿を今改めて振り返ってみると、その主要な発表の場となってきたのは本誌『国語教育思想研究』であり、2009年の創刊号より数えて2022年12月現在第26号までが刊行されている中に、上原の教育思想やそれに基づく教育実践を考察したものが10本余りも収められていることがわかる。

この事實は、凡そ14年もの長きに渡り本誌の刊行を叶えてきた広島大学の難波博孝先生のご意志の表れとも言え、難波(2004)に記されている通り、先生は1999年に浜本純逸先生の紹介によって、上原が1968年に設立した「児童の言語生態研究会」に出会われ、その趣意に深く共鳴され、以来20余年に渡り同会に関わられる傍らで、自身の教え子や国語教育の現場教師また研究者に向けて上原の思想や実践を届ける試みを重ねて来られた。本誌に寄せられた上原に関する論稿も、その多くが先生を通じて上原に出会った研究者らの執筆したものであり、従って先生と本誌とは正に上原輝男研究を開いた最初の人であり場であったと言える。

本号はその難波先生が2023年度末に広島大学をご退任されるにあたり企画されたものであり、これまで提出されてきた論稿においても取り上げられることのなかった上原の未公開資料を、その教え子である「児童の言語生態研究会」会員が選りすぐり、それぞれに解題を添えてまとめたものである。

先に執筆者の先生方について、簡単にではあるが紹介しておく。本号の執筆者はみな、上原が1957年から1993年にかけて在職した玉川大学文学部教育学科の教え子であり、上原の生前から没後の現在に至るまで「児童の言語生態研究会」の中心的メンバーとして活動されてきた方々である。

「上原輝男語録」の最初の執筆者である中川節子氏は、1968年から1971年にかけて玉川大学に在籍され、3年次であった1970年より同会に参加。卒業後も繁く会に通い研究活動を続けられながら、東京

都内の公立小学校にご定年まで勤務されたご経歴がある。

続く執筆者の小林照子氏は、1972年から1976年にかけて同大学に在籍され、4年次であった1975年より同会に参加。中川氏と同じく卒業後も同会にて学びを深められながら、東京都内の公立小学校に勤務され、定年退職を迎えられた現在も新任教員の指導員や時間講師として現場教育に携わられている。

最後の執筆者である長浜博氏は、上記2名より少し時代を下る1981年から1985年にかけて同大学に在籍され、卒業後、東京都および神奈川県内の公立小学校に勤務される中で、1988年より同会へ参加。また1995年からは学習院初等科に移られ、現在も教壇に立ち続けておられる。

「上原輝男講義録」を担当された宮田雅智氏は、長浜氏の同級生であり、同じく1981年から1985年にかけて同大学に在籍された。卒業後は茨城県内の公立小学校に勤務されながら、1986年より同会に参加。途中、ご体調の事情により家庭教師に転身されたことを機に、中高生や大学生、また2020年からは就労支援施設を利用される社会人も含めた「児童」後の若者への教育に、上原の教育思想や教育実践を応用する試みを重ねられている。

「英才児の生きざま」を執筆された葛西琢也氏は、1965年から1969年にかけて同大学に在籍され、3年次の1967年より同会の設立準備に携われ、翌1968年の会設立に立ち会われた。以来、会への参加は55年に及び、上原に関する膨大な資料を長年に渡り丁寧に保管・整理されてきた経緯により、本号では「仕事一覧」の作成も担当された。また、氏は卒業後数年を経て、上原が1969年に国語科カリキュラムを作成した東京都武蔵野市の聖徳学園小学校に勤務され、ご定年に至るまで多くの英才児と日々を共にされたご経歴を持つ。2006年には『英才児—その神性と野性』を上梓されているが、本号に展開された英才児をめぐる上原語録の解題は、そうしたご経験に支えられたものである。